

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】 柿沼 陽平

【所属】(助成決定時)日本学術振興会特別研究員 PD

【研究題目】 中国南北朝時代における貨幣経済史の研究

【研究の目的】

中国南北朝経済史に関しては、従来土地制度(均田制等)や銭の類型学(古銭学等)、あるいは財政史に焦点を絞った研究も多い。しかしそれらはどれも、当時の銭や布帛の社会的機能や、それらのフローのあり方を具体的に解明することを目的とした研究ではない。とくに北朝に関しては、史料不足もあり、貨幣経済に関する研究はほぼ皆無である。それゆえ申請者は、とくに中国貨幣経済史上の決定的空白ともいえる南北朝貨幣経済史の存在を闡明し、その時代的特質を体系的に解明することを目的とする。また現行の世界経済史学界において南北朝を含む中国古代貨幣経済史に対する考察が全般的に不足し、それ以外の地域とテーマを主軸にする研究が多い現状を相対化し、世界経済史研究を中国古代史の側から補完することも目指す。これは、学術的・教育的意義を有するとともに、世界経済史の中での中国经济史の位置付けをしめすことを通じて、国際的な学術交流と歴史認識の対話を推進しようという社会的意義をも持つものと考えられる。

【研究の内容・方法】

以上の研究目的を達成するにあたり、南北朝経済史に関する史料を収集し、その中でもとくに銭と布帛の授受の事例に注目した。そして1つ1つの事例を分類し、誰から誰にいかなる理由に基づき何が渡されたのかを闡明し、その統計をとった。この手法はじつは、戦国秦漢貨幣経済に関する拙著『中国古代貨幣経済史研究』(汲古書院、2011年)や拙稿「後漢時代における貨幣経済の展開とその特質」(『史滴』第31号、2009年)でも採用し、各時代の貨幣経済の特質を把握するのに非常に有用であった。それは、当時の人びとがいかなる時に、どの貨幣を授受に用いたのか、それが全体的に貨幣経済に一体いかなる効果をもたらしたのかをしめすものである。本研究では以上の手法に基づき、正史の中から魏晉南北朝時代の貨幣の授受に関する用例を1000以上収集・分析した。また南北朝貨幣経済をより性格に理解するため、とくにその前段階に位置する三国時代の貨幣経済の解明にも尽力した。そしてそのような南北朝貨幣の用途に関する史料分析の成果を、秦漢時代のそれと比較し、相互の時代的差異を確認し、その理由を模索した。

さらに上記の研究成果を紙媒体で発表する前に、まず国内外で学会報告を行ない、関連研究者のご意見を頂戴することに務めた。たとえば2012年8月に南アフリカで開催された世界経済史会議などに参加して、世界経済史のなかで自らの研究課題の位置付けを模索した。それを通じて、ただ単に史料収集にとどまることなく、それらを世界経済史の中に位置づける方途を模索した。

【結論・考察】

以上の研究計画と研究手法をふまえ、現在までに、論文「蜀漢的軍事最優先型経済体系」(『史学月刊』2012年第9期、2012年9月、28-42頁)と、学会報告「孫呉貨幣経済の構造と特質」中国出土資料学会(2012年3月10日、於東京大学)、「中国南朝劉宋貨幣経済的結構及其特点」第六届中国中古史青年学者聯誼会(2012年8月26日、於復旦大学)を成果としてまとめた。北朝貨幣経済史に関しては今後成果が刊行される予定である。その中で私は、後漢魏晉南北朝時代にそれ以前と同様の貨幣経済が存在したこと、それが秦漢経済とは質的に異なること、同時に当時民間には贈与交換の慣習もあったことを論じた。

これは、「中国魏晉南北朝時代には、秦漢時代ほどの貨幣經濟の隆盛はみられなかった」とする通説と正反對の結論で、「中国中世」の時代的特質を全面的に再検討する必要性を喚起するものである。では贈与交換と貨幣經濟がともに隆盛を迎えるという一見矛盾した時代相はいかに存立していたのか。私見によれば、これこそが「中国中世」の時代的特質であるが、今後はこの点の解明が課題となる。かかる課題を見出せたことも成果の一つである。